六条大麦の作付面積と収穫量（北陸地域）

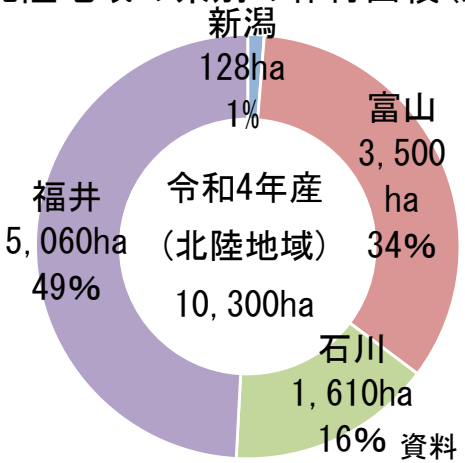
資料1－2

○　北陸地域は六条大麦の主産地であり、令和４年産の作付面積は全国の作付面積（19,300ha）の53%を占める10,300ha。

○　北陸地域のうち、福井県が作付面積5,060ha（49%）、収穫量18,100t（48%）、富山県が3,500ha（34%）、収穫量13,400t（35%）であり、福井県は、令和４年産六条大麦の作付面積及び収穫量ともに全国１位。

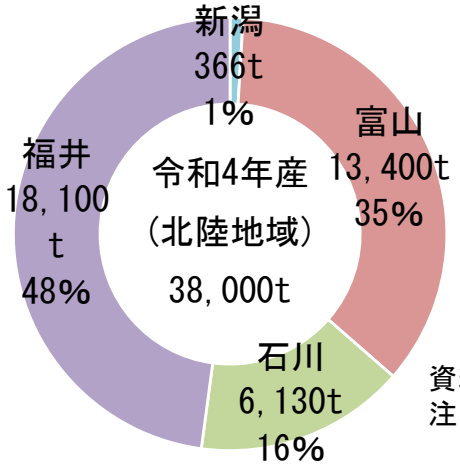
○　北陸地域の10a当たり収量は369kg/10aであり、全国平均の337kg/10aと比較して高い。

◆北陸地域の県別の作付面積（六条大麦）



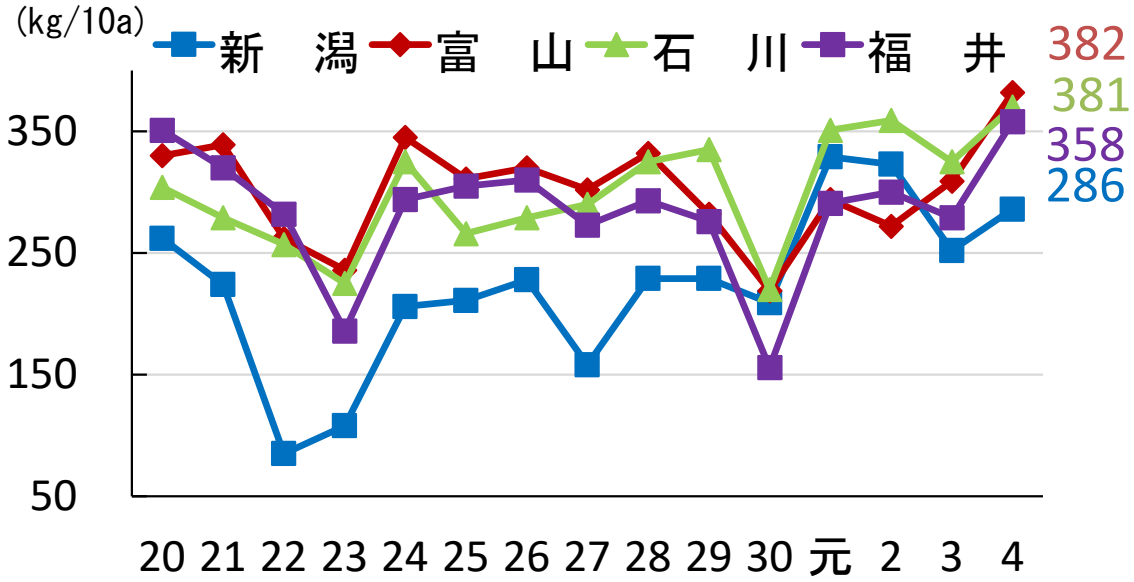
資料：統計部「作物統計」

◆北陸地域の県別の収穫量（六条大麦）



資料：統計部「作物統計」
注：合計値と内訳の計はラウンドにより一致しない場合がある。

◆北陸地域の県別の10a当たり収量（六条大麦）



資料：統計部「作物統計」

※なお、北陸地域の令和4年産の二条大麦及びはだか麦の作付面積は、それぞれ2ha、4haと極めて少ない。

六条大麦の品種構成（北陸地域）

○　北陸地域における六条大麦の品種構成は、令和４年産では新潟県でミノリムギ、富山県、石川県、福井県ではファイバースノウの作付が多い。また新潟県では、作付面積は少ないものの、農研機構中央農業研究センターが開発したゆきはな六条が一部で作付けされ、ウイスキーや焼酎の原料として活用可能。

○　近年、食物繊維などの機能性成分を多く含むもち性大麦について、実需者からの強い要望を踏まえ、北陸地域においても、農研機構中央農業研究センターが開発した「はねうまもち（北陸皮糯58号）」の作付面積は拡大。

◆六条大麦の品種構成

県名	令和4年産（速報値）		
	品種名	作付面積（ha）	作付割合（%）
新潟県	ミノリムギ	69	59
	はねうまもち	44	37
	ゆきはな六条	4	4
	計	116	100
富山県	ファイバースノウ	3,476	100
石川県	ファイバースノウ	1,452	100
	ホワイトファイバー	4	0
	計	1,456	100
福井県	ファイバースノウ	4,270	87
	はねうまもち	631	13
	計	4,901	100
北陸地域計		10,050	

資料：北陸農政局生産部生産振興課調べ

◆ファイバースノウの特徴

・ミノリムギより倒伏に強く、耐雪性、耐寒性に優れる。
・精麦白度が高く、精麦品質が優れる。

◆ゆきはな六条の特徴

・六条種としては大粒、軟質であり、ウイスキーや焼酎の原料として活用できる。
・耐倒伏状が強く、うどんこ病に極強である。

◆はねうまもちの特徴

・ファイバースノウのもち性突然変異品種。
・うるち性大麦に比べ、もちもちとして食感が優れる。
・機能性成分β-グルカンをファイバースノウの約1.4倍多く含む。

北陸六条大麦の課題・対策

【現状：令和4年産】
○ 全国19,300ha（64.8千㌧）に対し、**北陸地域では、10,300ha（37.8千㌧）**と**全国シェアは53%**。
○**福井県**（5,060ha、対水田面積14%）及び**富山県**（3,500ha、対水田面積6.3%）の**2県で北陸の8割**。

【課題】

【生産】
○　収量は、
1　気象条件（降雨、日照）
2　湿害（発芽率の低下、出芽遅延等）
3　雑草の土壌養分吸収による生育競合。
4　収穫期（梅雨時期）の穂発芽や赤カビ病による被害
により低下する傾向。（品質も同様に低下）。
※六条大麦は、梅雨前（5月下旬）に収穫が終わるため、穂発芽や赤カビ病の被害は少ない。

【販売】
○　実需者から求められる品質・量を踏まえ、実需との需給バランスが安定しており、引き続き供給することが必要。

※主に押麦（食用）、麦茶用として、はくばく（山梨県）等に販売。

【対策】

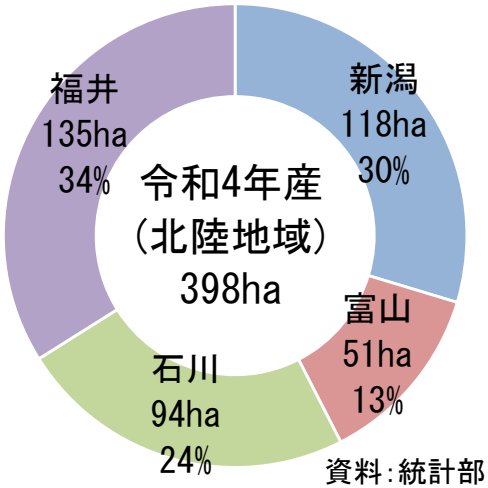
【生産】
○　収量確保のための基本技術として、（①排水対策、②適期作業（生育診断に基づいた追肥、雑草防除、赤カビ防除等））に沿った適切な肥培管理が必要。
1　土壌分析、収量データによる施肥設計を行うとともに、有機資材等による土づくりを実施。
2　実需者の求める加工適正が高い六条大麦「ファイバースノウ」などの品種を導入。
3　一定の品質・数量を確保し、作業効率を図るため、団地化も必要。

【販売】
○　安定供給するため、実需者のニーズ把握と、生産者側・実需者側の結びつきを拡大するとともに、品質・量等が実需者の要望を満たし信頼される麦産地づくりが必要。

小麦の作付面積と収穫量（北陸地域）

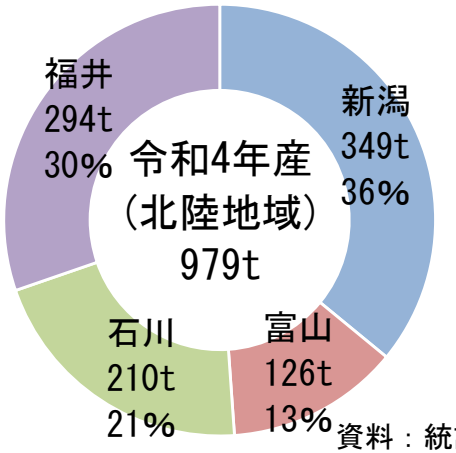
○北陸地域での小麦の栽培面積は398ha、福井県135ha、新潟県118ha。
○令和４年産の10a当たり収量は、北陸平均で246kg/10aであり、全国平均(437kg/10a）と比べて低い。

◆北陸地域の県別作付面積（小麦）



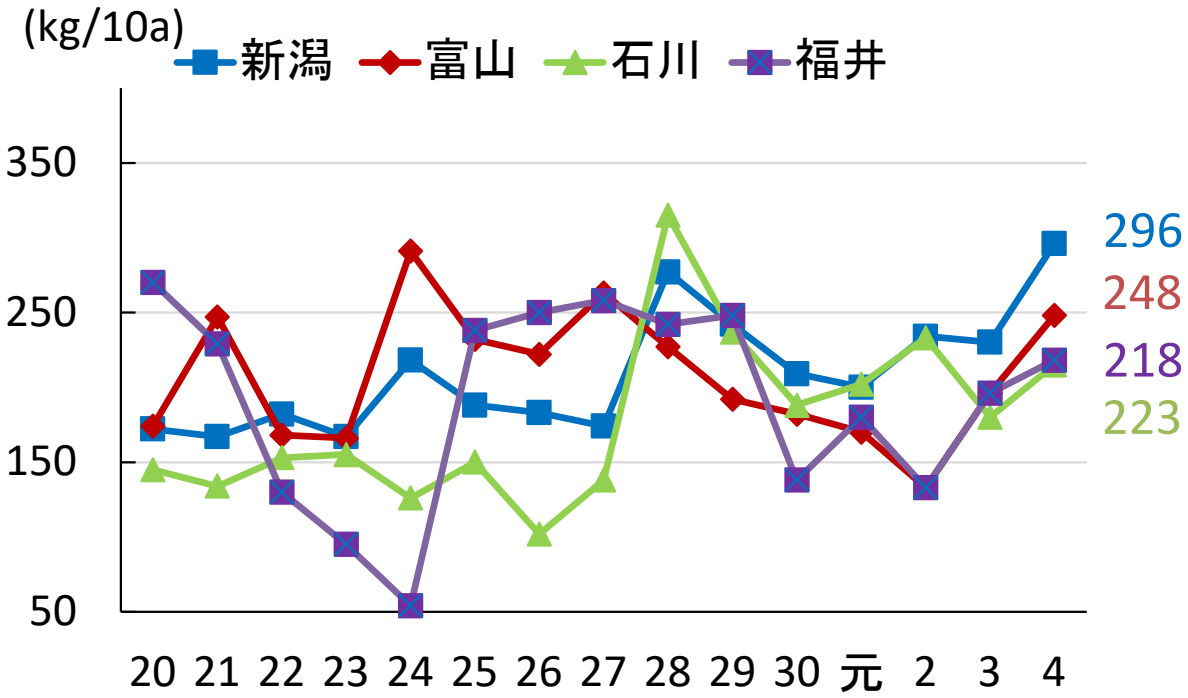
資料：統計部「作物統計」

◆北陸地域の県別収穫量（小麦）



資料：統計部「作物統計」
注：合計値と内訳の計はラウンドにより一致しない場合がある。

◆北陸地域の県別の10a当たり収量（小麦）



資料：統計部「作物統計」

小麦の品種構成（北陸地域）

○小麦の品種としては、新潟県、石川県では、耐寒性に優れるゆきちから、福井県では福井県大３号を作付け。
北陸地域で作付けられる品種は、いずれも早生品種となっている。

◆北陸地域における県別の品種作付割合（小麦）

県名	令和4年産（速報値）		
	品種名	作付面積（ha）	作付割合（%）
新潟県	ゆきちから	91	85
	夏黄金	16	15
	計	107	100
富山県	―	―	―
石川県	ゆきちから	52	67
	シロガネコムギ	26	33
	計	78	100
福井県	福井県大3号	125	100
北陸地域計		310	

資料：生産振興課調べ

◆ゆきちからの特徴
- 高蛋白で、製パン適性に優れる。耐寒雪性・耐倒伏性が強い良質品種で、適正な施肥管理により、安定した品質・収量が得られる。

◆夏黄金の特徴
- 生地の伸張抵抗が強く、製パン適性に優れる硬質小麦である。
- 播性が Vのやや早生種、耐雪性は中程度で寒冷地での栽培に適する。
- 「ゆきちから」と比較して収量性は同程度で穂発芽耐性および赤かび病抵抗性は優る。

◆福井県大3号の特徴
- 「ナンブコムギ」より、1週間から10日早生で、梅　雨入りする前に収穫ができます。また、「ナンブコムギ」より10～20%多収である。
- 早生種、耐雪・耐寒性がある。
- 小麦粉のタンパク質含量は10～11%と準強力粉ですが、小麦粉ドウは強力粉なみに粘弾性が高く、様々な用途に使用できる。

北陸小麦の課題・対策

【現状：令和4年産】
〇全国227,300ha（987千トン）に対し、**北陸地域では、398ha（0.9千トン）**と全国シェアは0.2%。
〇**福井県**（135ha、対水田面積0.4%）及び**新潟県**（118ha、対水田面積0.1%）の**2県で北陸の6割**。

【課題】

【生産】
〇　収量は、
1　気象条件（降雨、日照）
2　湿害（発芽率の低下、出芽遅延等）
3　雑草の土壌養分吸収による生育競合。
4　収穫期（梅雨時期）の穂発芽や赤カビ病による被害
により低下し、品質も同時に低下。
※収穫期の降雨（6月上中旬）による品質低下を経験したため、現場では小麦よりも雨の影響が少ない六条大麦を選択。

【販売】
〇　実需者の求める品質、量に至っていない。一部で取組があるものの、販売先が安定していない状況。

※主にパン、麺用として、丸榮製粉(新潟県)、沼田製粉(富山県)、金沢製粉(石川県)等に販売。

【対策】

【生産】
〇　収量確保のための基本技術といて、（①排水対策、②適期作業（生育診断に基づいた追肥、雑草防除、赤カビ防除等））に沿った適切な肥培管理が必要。
1　土壌分析、収量データによる施肥設計を行うとともに、有機資材等による土づくりを実施。
2　実需者の求める品質（パン、麺）に適した品種「ゆきちから」を導入。
3　特に、赤かび病の防除、穂発芽のための技術指導や横展開。
4　一定の品質・数量を確保し、作業効率を図るため、団地化も必要。

【販売】
〇　安定供給するため、実需者のニーズ把握と、生産者側・実需者側の結びつきを拡大するとともに、品質・量等が実需者の要望を満たし信頼される産地づくりが必要。
→実需者を起点とする地域連携の下、新需要を捉え小麦産地を拡大

２．基本法制定以降の情勢の変化
（２）主な品目
Ⅱ 小麦

－ 我が国における小麦の生産量は、この20年間で増加しているが、輸入が大宗を占める 構造の変化までには至っていない。また、単収が安定しないことに起因して収量の年次変動が大きく、量の観点から需要と 供給のミスマッチが生じている。
－ また、品質は外国産と比べて遜色がない程度まで向上しているものも少なくないが、年 や地域における品質の振れ幅が大きく、安定化が課題となっている。
－ これらのことから、実需者としては外国産からの置き換えにはリスクがあり、即座に国産へ の転換に踏み切れない状況。
－ 国産小麦の需要拡大を図るためには、「量」及び「品質」の両面から安定した生産供 給体制を構築・強化していくことが必要

※食料・農業・農村をめぐる情勢の変化（需要に応じた生産）令 和 ４ 年 １２ 月より抜粋